



グラウンドが水没した峰山中学校(平成23年9月)



昭和38年頃 当時としては斬新なデザインの教室棟(南側が通路)

水の思い出 ⑤9

昨年の9月、台風15号が関東に上陸。市内でも堤防が決壊しそうになったり、道路が通行止めになったりと様々なところで被害の様子が聞かれた。そんな中、峰山中学校のグラウンドが水没してしまったという話が耳に入った。

約20年前の私が中学1年生の時、やはり台風で中学校のグラウンドが水没してしまったことがあった。私は剣道部で、部室には防具を置く棚があったが棚は上段から上級生が置く決まりになっており、1年生は1番下の段に防具を置いていた。台風の翌日、部室に行ってみると部室は3分の1くらい水につかってしまい、防具も水につかってしまうというとんでもない状況になっていた。正直、そこまで水が来るとは思っていなかったが里川の近くということもあり、水がたまりやすい土地らしい。友人たちが自分の防具を水から引き揚げ広げて乾かしたりしている中、私は自分の防具を見つめていた。なんと防具は濡れていなかったのだ！なぜかという台風前日、防具は教室にあったからだ。今、思い出すとなぜ防具が教室にあったのか定かではない。道場に行こうとして置いといたのか、体調が悪くて練習を休んだのか…。何にせよみんなの被害を気の毒に思うと同時に、被害がなかったことにホッとしたのを覚えている。

峰山中学校の体育館と校舎は新しくなったが、台風の被害は大丈夫だったのか。剣道部の部室は浸水しなかったか。水没してしまったグラウンドを見て当時の記憶が蘇るのであった。(萩谷 浩司)

特集 学び舎の思い出

河内小学校

正門の坂が急だったので、給食の汁物がよくこぼれてがっかりした。

昭和56年4月に西河内上小学校と町屋小学校が統合されて生まれた「河内小学校」は、平成23年度（創立31年間）をもって閉校となった。今回思い出をお伺いした平山一史さん、菊池美由紀さんは河内小学校第一回卒業生。今でも毎年正月に何人かの同級生と集まっているそうです。



統合当時の河内小学校

西河内上小学校の子どもたちにとって、一番大きな変化といえば、通学方法が徒歩から路線バス利用になったこと。一般の乗客も大勢いる中で、最上級生だった菊池さんは下級生にも気を配ったり、運転手さんへの挨拶を教えたりした。帰りのバスを待つ方は、時間がとても長く、寂しかったのを覚えている。町屋の子どもたちは、定期券を持ってバスに乗る西河内上小学校の子どもたちがとてもうらやましかった。

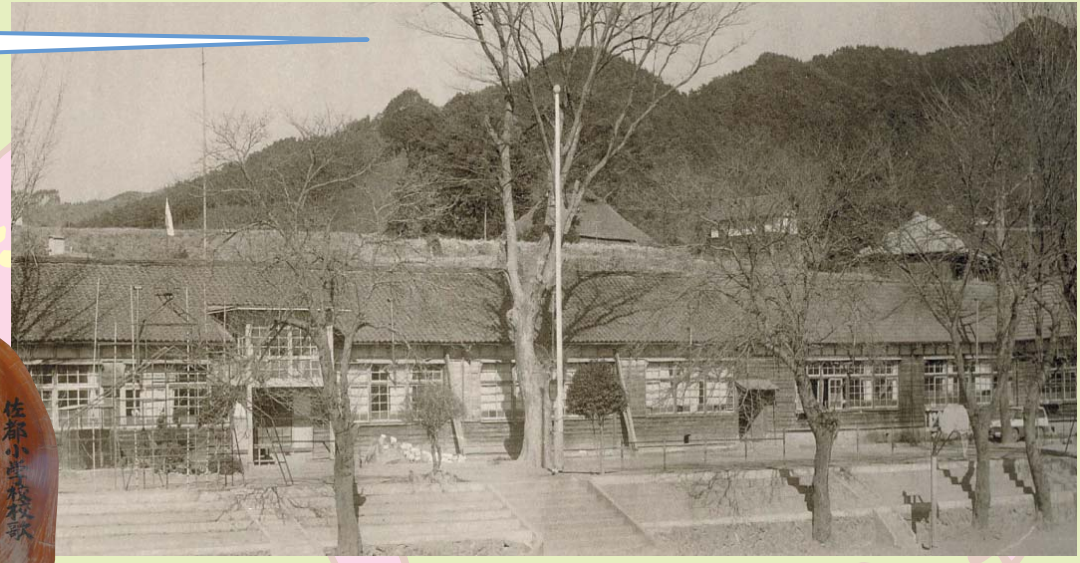
校章のデザインは児童が選んだ。「親和」「協力」「絆」「豊かな自然」「郷土愛」地区の5町をけやきの若葉で表した校章にたくさんの願いが込められた。



河内小学校校章

佐都小学校

写真中央の大ケヤキは、昭和45年に伐採された。そのケヤキを製材した板に地元の方が校歌を書きました。



昭和40年頃の佐都小学校



現在の校舎ができた翌年入学したかたから伺いました。5年生の頃に「ランチルーム」という部屋ができて、学年ごとに順番でその部屋で給食を食べることができた。今の保健室・会議室を合わせたところだったと思う。県の視察があり、楽しく食べているところを写真に撮られ、友達が笑っているところがポスターになり、子どもたちがみんなで「いいなあ」と見たのを覚えている。



佐都小学校昭和47年入学式

入学式の写真を見てみたら、ほとんどのお母さんが着物・黒羽織姿で時代を感じたが、きっと正装をしていくほど大事な事だったのだと思う。

通学路に白羽橋や茅根橋など木造の橋が多くあった。橋の上から下を向いて川を覗き込んだ友人がいて、ランドセルの中の教科書が全部川に落ちたことがあった。その後の顛末は覚えていない。



運動会の様子（昭和47年）

◎この頁でご紹介した3校は、平成23年度でその歴史の幕を降ろし、新しい伝統を築きあげる一步を踏み出すことになりました。

瑞竜小学校

学校は、長い間地域の中心としてすぐそこに「在り」ました。学校は、子どもたちが通い学ぶ場所としてだけでなく、親たちも集い、関わり合いながら様々な課題を解決し、つながりを深める場としての役割も果たして来ました。故郷の景色の真ん中に「在る」学校、そこから生まれたたくさんの思い出をご紹介します。
(高橋靖浩、後藤百合子、関根悦美)



瑞竜小学校 昔の校舎

昭和30年代の瑞竜小学校は、校舎が現在のグランド南側で桜の木（瑞桜）も畑の中にあった。トラックも斜めに50mしかとれない本当に小さなグラウンドであった。校舎では、校長室わきの3教室の間仕切りを取って、式などを行ったことが思い出の一つである。給食は自校給食であった。校舎裏の給食室に児童は野菜などを家から持ち寄り、ご飯は各自持参した。冬はだるまストーブでそのご飯を温めたこともあった。
(瑞龍町在住卒業生談)



世矢小学校



当時の世矢小学校舎（昭和11年～昭和59年の48年間使用）

正門を入ると、記念碑『茨城百景 真弓山と寒水石』が目に入り込んで来る。白いペンキで塗られた百葉箱も記憶に鮮明であるが、春になると西側昇降口まで続く桜の木々は見事としか言いようがない。「桜が咲けば蝶がまい…」で始まる校歌の如く、満開になった桜の下を歩いて校舎に入って行く、なんと綺麗で素敵だったか、記憶が蘇る。

また、校舎の瓦屋根には赤茶色の特徴ある通気口が数個、校舎裏側には防空壕跡がいくつかあり、中に入るとひんやりとし、特に夏は快適だった。裏側にある古い校舎の西端に、昭和22年～28年まで中学校舎として使用されていた2階建て（一部3階）の大きな校舎があった。その3階部分には中学生が科学で勉強した動物や虫などのアルコール漬けのビンが置いてあり、何とも気味が悪かった覚えがある。倒壊防止のための数本の太い丸太の支え棒とギンギシと音がする床に多少の不安を覚えたが、普通教室3個分ぐらいの広さを有する2階部分は、北側高台に中学校が新たに建てられると、小学校の「音楽の時間」や「映画の上映」に利用していた。冷たい水にもめげず手を赤くしながら夢中でやった雑巾がけも今では懐かしい思い出の一つである。「世矢は心の花の学園理想はかほる…」いろんな思い出が詰まった学び舎でした。



2階建校舎（写真奥）
昭和22年～28年まで中学校舎として使用、
それ以降は小学校の音楽室として使用された



現在の世矢小学校新校舎（昭和60年～）

世矢中学校



当時の世矢中学校舎（昭和28年～昭和61年の33年間使用）

小学校の北西側には中学校のサブグラウンド（下グラウンド）があって、放課後になるとろうきゅうぶ（バスケットボール）、はいきゅうぶ（排球部）そして庭球部（軟式テニス）の部員たちが集っては、コート狭しとばかりに動き回り練習に夢中になったものだ。下グラウンドを右に見ながら急な坂道を上がって行くと中学校の正門が見えてくる。グラウンドは赤土で雨が降るとすぐぬかるんで通り抜けできず、東西の片隅を歩いて校舎に入る。

グラウンドの東側の角には野球部のバックネットがあり、ピッチャーマウンドが高くなっておりそこから投げ下ろすのがなんとも爽快であった。グラウンドは両翼ともに浅く、打球が右翼に飛ぶと校舎や家庭科室のガラス窓が破れ、左翼に飛ぶと民家の畑や屋敷内にボールを探しに行っては、おじさんによく注意されたものだ。それでも先輩の方が怖かったのか、一年生はいつもボール探しに夢中でした。西側にはバスケット後板があり、昼食を急いで済ませ我先に飛び出して行ってはフリースローを競い合った。

体育祭は行事名からして中学生になったという思いが一層強くなる。「迫力ある棒倒し、障害走、対抗リレー、綱引き、タンブリング、ダンス等」、父兄は「紅白玉入れ、樽回し、スプーンリレー等」が定番、共に楽しみ、大いに盛り上がった。また、小学校前には学校田があり稲作活動が行われていた。農作業小屋もあって、足踏み用や発動機どうみの脱穀機、唐箕を使って収穫の喜びを味わうことができた。どれをとってみても今では懐かしく良き思い出である。（高橋 靖浩）



現在の世矢中学校舎（昭和62年～）

懐かしい当時は写真を振り返るあれこれ

- ・中面上段、中学校の写真は1979年撮影
- ・中面下段、小学校の写真は2000年撮影
- ・周りのスナップ写真は1959年撮影



秋の収穫祭（脱穀）



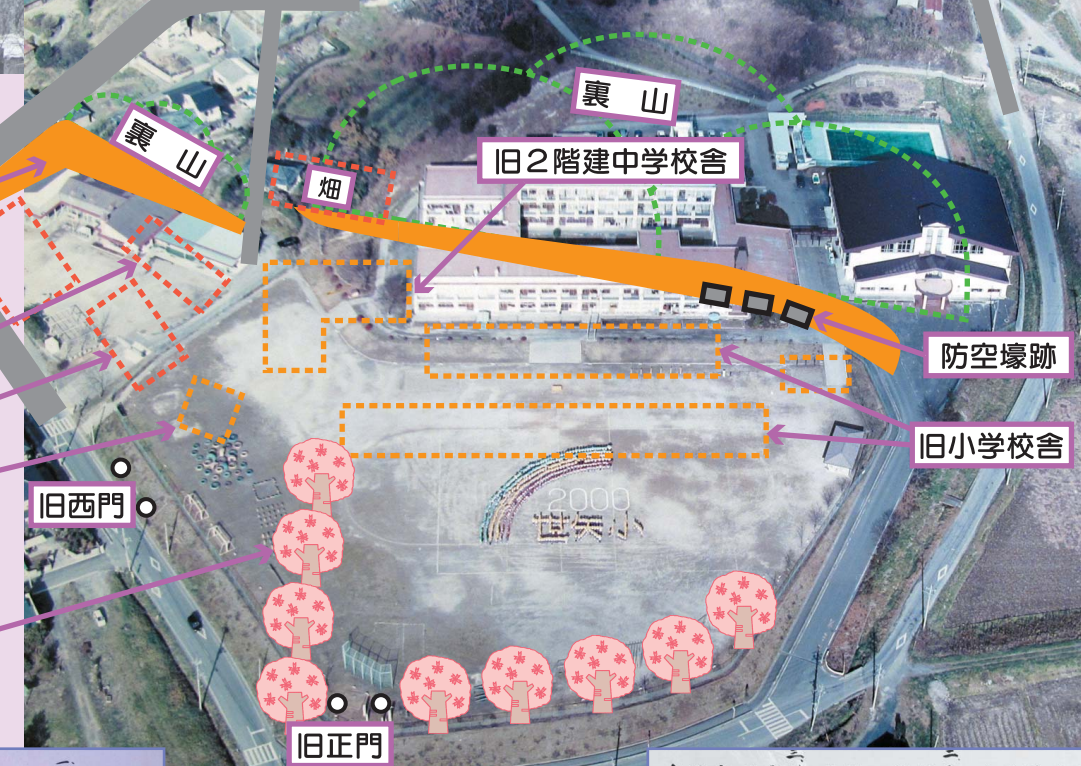
男子籠球部



女子籠球部



排球部



野球部



ソフトボール部



棒倒し



タンブリング（組体操）

世矢小学校校歌
作詞 酒井清一
作曲 若井隆志

一桜が咲けば蝶がまゝ
紅雲が散れば雲がまゝ
つばらひんがの若人の
世矢は心の花園
理想ははばらとくしに

二真砂の山に日がのぼる
寒水谷に夜がゆるる
伸びる力の若竹に
朝はほろろと日が光る
朝も、朝も、つよも

三ゆく水もく野の末を
冬は流れて、海とつながる
のぞみはるか若鳥に
夢は葉くむつとくしに
真理をきくもろくに

世矢小学校校歌

世矢中学校校歌
作詞 朝日賢
作曲 朝日賢

一曇りの山に陽は映きて
稔りゆかぬ世矢の里
希望あふれる学舎に
誠の道を求めん
友情の輪をまわし
なげき 功を世矢中学校

二寒水谷の峰
気高き姿 永遠に
理想を 志す
心明かす 勇気
雄々 進む 世矢中学校

三柳のたけり 先賢の
高き勲を 伝統の
教を承けて 今も
文化の光を 受けつゝ
若き 志を 羽ばたかせ
大に 伸ぶ 世矢中学校

世矢中学校校歌

百姓母ちゃん農日記 ⑤



『冬の青々とした菜っ葉』

冬、何もなく枯れ果てたように見える畑の中で、かろうじて不織布で覆った下から、ホウレンソウ、小松菜などの露地野菜を収穫する。土に覆われた下からは人参、大根を収穫する。一見畑には何も無いように見えるが実は脈々と命をつなげてがんばっている小さな生命を、私たちは収穫して、みんなの台所に届ける。

緑の中でむせ返るような夏の収穫とは正反対の、冬の収穫作業。ツルハシを振り上げて凍土を砕き、土の中から収穫物を取り出し、根っこを切る。根っこさえあれば、野菜は凍っても腐ることなく、生命を維持している、すごいことだ。3月、気温と地温の変化に敏感に反応して、作物は春を感じ伸び始める。ようやく葉物の生長点が伸び始めて、体つきもがっしりとしてくる。

それはまるで子どもと同じだなと思った。

子どもたちも寒い冬の時期は屋内中心に遊び、少し暖かくなってくると、勇んで外を飛び回る。春の空気をいっぱい吸って、ひとまわり大きくなって進級進学を迎える。

まるで限界集落のような山里でも、子どもがいる光景は、まさに冬枯れた畑の中の青々とした菜っ葉のように、私たちに春を感じさせ、心を和ませる。

その菜っ葉は根が張れていないと、途中で腐ったり、病気になったり、霜でやられたりする。地域という土壌がしっかりしていれば、菜っ葉は根を張り、青々とした葉を伸ばすことができる。本当に大切なのは土作りなんだと気づく。

子育てに困ったら、まずは畑を耕し、土と向かい合ってみるのもいいかもしれない。

(布施 美樹)



子育て奮闘記

踊るママパラダイス ⑤9

私の子ども達がお世話になった小学校が児童数の減少により、この度、閉校となりました。

県南で生まれ育った私は、児童数が千人近い小学校だったため、長女のスマシを入学させるときは随分さみしい学校だなと思ったものです。6年間一度もクラス替えがなく、体育ではサッカーのチームを二つ作るにも人数が足りないなどと、私にとっては未知ともいえる学校でした。その中で、友達と上手くやれなかったらどうするのかなどが、中学校に入ってから人数の多さに萎縮するかもしれないと、親の方が不安になった覚えがあります。

しかし、今思い返すと全ての児童がお友達、少人数ならではのきめ細やかな教育に、ありがたいと思いきり、不満を感じることも少なく穏やかな環境でした。

ありきたりの言葉ではありますが、子ども達の大切な思い出の場所として、たとえ学び舎は無くなっても心の中に温かく残ることでしょう。閉校はつがの間、私をあの頃の感覚に戻してくれて、懐かしく、しがし戻れない現実を見せてくれました。

子どもが大きくなると子育て中の悩みを忘れがちですが、振り返るとどんなにつまらなく思える悩みでも親にすれば大きな壁でした。お店でレジに並び若いお母さんが泣いている赤ちゃんを抱いて困った顔をしている姿を見ると切なくなります。私もそうでした。今は自分の荷物だけ持てばいいけど、子どもが小さいときはあなたと同じでしたよ。長いトンネルにいる気分でした。トンネルを抜けたことも気づかない内に子どもは大きくなっていました。時がたてば、今の私が現在の子育てで抱えている問題を懐かしく思うことがあるのでしょうか。子どもの成人式の時かな、結婚の時かな？それはそれで楽しみですね。

— わいわいネット 織田 裕子 —

髪がぬけたり白くなったり…

